

存在論的転回のパースペクティブにおける

疫病人類学

景軍・何明（訳＝宗曉蓮）

はじめに

本論は、「存在論的転回」(ontological turn)を導入として、人類学に関係する伝染病の研究について、その要点を紹介し、論述することで、新型の流行病とコロナウイルスによる肺炎を背景に、医療人類学 (medical anthropology) 理論が関係する実証主義的研究への指導的意義を分析、議論していく。

近年、現れた存在論的転回の趨勢は、人類学の物・我が対立する世界観への批判と天人合一的宇宙観の肯定である一方、人類学の物・我存在の多元的認知体系の承認に対して、人間中心主義と唯科学主義への反対の立場から、人類学のニューノーマルを開拓するものである。

近年、人類学の存在論的転回に関する議論は非常に多くの議題に波及し、認識論、方法論、理論的パースペクティブから学問領域の改革の必要性にまで及んでいる。そのなかには、比較的重視されている研究者としてロイ・ワグナー、マリリン・ストラザン、ブルーノ・ラトゥール、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ、フィリッポ・デスコラ、エドゥアルド・コロンらがいる。もし、ワグナーやストラザンらが早期に形成した部分的な観点を現在の人類学の存在論的転回の予言であったとするならば、ラトゥールらは人類学の存在論的転回のデザイナーということができる。

ラトゥールは『*An Inquiry into Modes of Existence: An Anthropology of the Moderns*』のなかで、「オブジェクト指向存在論」(object-oriented ontology) を提示し、自然科学や社会科学

が人と自然をはっきりと区分する傾向を批判した⁽³⁾。カストロは、*Cannibal Metaphysics* において、人類学内部における世界存在の多元的認知への蔑視があると認識し、このために思想を解放する態度と「自決存在論」(ontology of self-determination) の受け入れを説いた⁽⁴⁾。フィリップ・デスコラは、*Beyond Nature and Culture* のなかで「四つのタイプの存在論」(four types of ontology) ‘すなわち、アニミズム、トーマニズム、アナロジの価値は、自然主義と同様であるとの考えを示した⁽⁵⁾。エドゥアルド・コーンは、*How Forests Think* において、自然主義の汎神論と自然主義の対立を「逆行存在論」(inverse ontology) と解釈し、大きな論争を引き起こす人間以外にも思考能力があるという説を提出した⁽⁶⁾。

これらの新たな民族誌をもとに存在論的転回を提唱する研究者たちは、みな、自然を改めて人類学に引き戻すことで、人間文化の描写のなかに新たな解釈を施そうとしている。こうした人類学存在論的転回が人類学の方向を意味するのか、あるいはその経路なのかに関わらず、存在論的転回的主流なディスコースを先導する学者たちと民族誌は、基本的に、人間と自然の関係を念頭に置いている点が共通している。

人類学存在論的転回に関する議論に、中国の研究者たちは現在のところほとんど加わっていない。関連する見解

としては、朱炳祥による、存在論的転回とはすなわち研究対象の主体性と主観的認識の表明を人類学の主旨とする見方がある⁽⁷⁾。また、王銘銘は、費孝通の「天人合一論」により人類学存在論的転回を分析する作業をおこない、存在論的人類学とは人と自然の関係をその核心的な問題とするという本質に触れている⁽⁸⁾。そして、朱曉陽は「地球科学」(earth science) の部分的概念を借用し、「地勢民族誌」へと転化する試みをおこなうことで、存在論的人類学の基本的な精神を実践的で具体的な研究として実行している⁽⁹⁾。

これらと比べると、朱劍峰がその論文のなかでおこなった人類学存在論的転回の議論は、より確信的で、全面的であるといえよう。グローバルな生態の危機時代における人類学の応答において、彼は「生物多様性民族誌」(multi-species ethnography) を人類学存在論的転回の具体的な事例としてとりあげ、物と人の「共生」(symbiosis) 概念と、「種間の越境」(interspecies) 概念を用いて、存在論的転回とは一体何を意味するのか、そして生物多様性民族誌とは一体何を指すものなのかを説明している⁽¹⁰⁾。

朱劍峰の説明を簡潔にまとめてみれば、生物多様性民族誌の研究対象とその範囲は、人間とその他のものを含む広汎な自然界であること、また、人類学の世界ではよく知られたヌアアの人々と牛の群れと草の記述や、一連の薬用植物の民族誌などはみなこれに属することである、ただ、異

なっているのは、近年の関連する研究は、生態環境の危機的状況の悪化を正視し、人間中心主義に抵抗する必要性を提示している、との内容である。このように朱劍峰の提唱する多種間「共生」概念も理解しがたいものではなく、多種間の共生関係は古くから存在してきたものであり、人間ではないある種と、他の種との共生共存関係もまた、子どもであっても動物のドキュメンタリーを見ることで理解できることである。ただ、朱劍峰が示した「多種間の境界を超える」ことと人類学の相関性は、より実証的な説明を要する。

以上の諸視点や説明に関連して、以下では、最近盛んとなっている「ワンヘルス」説を合わせて本論の議論する前提とする。

コロナウイルスが世界を震撼させ大流行になっっている状況にあって、ワンヘルス (One Health) 説が、学術界、政界、メディアにおいて広く流行し始めている。ワンヘルスの提唱は、実際にはすでに十年の歴史があり、そのもつとも早い例は環境健康学と、獣医学に由来する。世界保健機関 (WHO) が五年前に定めた定義によれば、ワンヘルスは公衆衛生の状況を改善する多部門協力の戦略の一つであり、そのうちもつとも要点となる協力行動は、食品の安全保障、人畜がともに罹患する疾病の予防、抗生物質の薬剤耐性のコントロールにある。世界で最もよく知られ、最も評価の高い世界五大医学雑誌の一つである『ランセット』

(*The Lancet*) 誌は、近年、ある委員会を組織し、そこでワンヘルスを動物、自然、人間の間の連鎖と生態、食物、薬物間の連鎖の相互関係と定義した。

その意義は、医学研究と診療実践は異なる種および地域の間で流行する、爆発的な感染をする伝染病を無視し続けることができないことを呼びかける点にある。なぜならば、新たに発生する、あるいは再発する伝染病のうち七割は人間と動物がともに罹患する疾病であり、また、食品に起源をもつ疾病の頻繁な出現もすでに負の影響を及ぼし、非常に大きな公衆衛生の危機となっているためである⁽¹⁾。人間と動物に共通する疾病は、種を超えて媒介の役割を演じるものが必要であり、もしそれがなければ発生することはない。すなわち、ワンヘルス説の主旨は、一連の伝染病のウイルスの起源を説明すること、とくに新たな伝染病のウイルスが自然に端を発しており、人間が自然を重視する必要があること、にある。

ワンヘルスと人類学の存在論的転回とに関係性が発生し、この概念のもとに連なる一連の問題が医療人類学のカテゴリに属するとすれば、伝染病の大流行の中、伝染病、あるいは疫病という領域において、人類学にどのようなことができるのか、という問題を突き付けるようになってくる。これが本論の命題である。

一 伝染病・疫病に関する従来の人類学研究

(一) 研究対象

次に挙げる伝染病とは、新型コロナウイルス以前に起きた細菌やウイルス、寄生虫、真菌が病原となる微生物が引き起こすものであり、直接あるいは間接的に人から人へと伝染する伝染病である。主に、人畜がともに罹患する疾病は、動物と人間の間で伝染する疾病であり、伝染経路は人間と動物の接触と、人間が食用とする動物に由来する産品である、と言える。

すでに古くから知られてきた、あるいは公衆衛生に大きな影響を与えた事件により、相対的に広く知られる伝染病には、インフルエンザ、肝炎、コレラ、天然痘、マラリア、ペスト、ジフテリア、ハンセン病、肺結核、麻疹、猩紅熱、百日咳、耳下腺炎、水疱瘡、髄膜炎、エイズ、頭部白癬、発疹チフス、住血吸虫、小児麻痺、疱疹、梅毒、狂犬病、SARS、新型肺炎などが含まれる。人々にあまり知られていない伝染病には、Q熱、クリプトスポリジウム症、クロイツフェルト・ヤコブ病、オウム熱、レジオネラ症、デング熱、炭疽病、レプトスピラ症、ノロウイルス、黄熱病、エボラウイルス、ポワッサンウイルス、野兔病、マールブルグ熱、リフトバレー熱、ウエストナイル熱、ジ

カウイルス、中東呼吸器症候群などがある。

世界に新型肺炎の感染が爆発的に流行するより前に、世界保健機関はこれら数多くの伝染病のうち一〇種を選び出し、早急に警戒が必要な新型流行病 (emerging epidemics) としていた。新型流行病とは、この伝染病が発見されてからあまり時間がたつておらず、人類のこの種の伝染病への知識と防疫技術が依然として初歩的な段階にあるものを指す。

世界保健機関は、二〇一五年にはじめて七種の優先的に防備する必要のある新型のウイルスとしてクリミア・コンゴ出血熱ウイルス、エボラウイルス、ラッサ出血熱、ニパウイルス、リフトバレー熱ウイルス、中東呼吸器症候群およびSARSウイルスを発表した。二〇一八年には、これにジカウイルスを加えるとともに、Xファクターによる感染症、すなわち、病因や病原が明確でないながらも広範囲に爆発的な感染を引き起こす可能性があり、人類に深刻な脅威となり得る伝染病への警戒の必要を示した。新型コロナウイルスによる肺炎の大流行は、世界保健機関のXファクターによる感染症の予測を証明することとなってしまった。

(二) 人類学的な研究の実績

これまでの伝染病に関する人類学的研究は、調査研究の契機、またはその実績を論じると、おおよそ四種に分類することができる。

一つ目は、偶発的研究、すなわち、フィールドワークの際に伝染病の流行に立ち会うことで、関連する研究を展開する種のものである。

一九四〇年代初頭、フランシス・シュー（許煒光／Francis L. K. Hsu）は中国雲南省喜洲において人類学研究に従事し、中国内外において著名な *Under the Ancestor's Shadow: Kinship, Personality, and Social Mobility in Village China* を著わした⁽²¹⁾。そのほか、これはあまり知られていないが、*Magic and Science in Western Yunnan* という作品にも伝染病の流行に関する記述がある。

フランシス・シューが一九四二年に雲南省喜洲で調査していた際に、コレラの大流行に出くわした⁽²²⁾。この年、ウェストタウン（West Town）の人口は総計八〇〇〇人であったが、コレラで落命した人々は二〇〇人に達した。この著作でフランシス・シューは、当該地域の人々が近代的な薬品と伝統療法、さらには幸福祈願や呪符、道士による儀礼などを併用する様子を観察、記録することで、非常に鋭い筆致によって、マリノフスキーが示した人類の思考モデル、すなわち理性と迷信の対立、宗教と科学の対立という人類学の古典的理論に内省と批判を加え、さらに人類学の世界に医学多元主義についての学説が発展する基礎を築いた⁽²³⁾。

また、二〇〇三年にSARSが猛威を振るった際に、人類学者である胡宗澤は、ちょうど河北省十里店村にて

フィールドワークの最中であった。彼は、十里店村における廟の祭祀の観察とインタビューから、相当程度の農民たちが天災を人災に由来する文化的ロジックからSARSを見ていることを明らかにした。宗教的説教や民間のことわざを通じて、新型の伝染病を認識可能な親しみのある伝統的な疫病に転換し、行為の面での法則としてはまず神に救いを求め、そのあとに医療に救いを求めて、国家と民間を統合して伝染病をコントロールする行動をそのあとに続けたことを提示した。そのうえで、政府の提起した科学的な防疫思想およびその措置と、民間のタブー、人々の心情、社会関係のネットワーク、道徳的判断が、時に矛盾や摩擦を引き起こしつつ自発的行動と行政の命令の相互融合的なダイナミックな関係を形成していたことを指摘した⁽²⁴⁾。

二〇〇八年には、カリフォルニア大学バークレー校のブリッグスが、ベネズエラの熱帯雨林に住む人々の集落を再訪した際に狂犬病の大流行に遭遇したが、その初期においては病因がはっきりとはしていなかった。狂犬病は、犬、狼、猫などの肉食動物による咬傷によって感染し、病原菌を持った動物を処分することで感染源を断つことができるが、この時の三八名の若者の命を奪った狂犬病の感染媒体は想定されなかった吸血蝙蝠によるものであった。患者の家族や伝統医療の医師、当該地域の看護師らの協力のもと、ブリッグスは感染病学の専門家であるブリッグス夫人

とともに急遽六〇時間余りのインタビューを収集整理し、当事者の経歴と経験からその病原の出所を判断して、ローカルな知識の重要性を証明した。⁽¹⁶⁾

二つ目は、介入研究である。

介入研究とは、フィールドにおいて当該地域の人々の伝染病の予防と管理の実践に参加するものを指す。エイズを例にとろう。ハーバード大学の医療人類学者であるフアーマーは、「健康パートナー」(Partners in Health) 専門家ネットワークを組織することで、ハイチに教育病院を開設した。ここでは、世界最先端の技術と薬品を使用して貧困者に奉仕し、医療実践のプロセスのなかで収集したエイズ感染者の困難さについての口述資料を収集し、学術界を震撼させる論文と著作を発表した。⁽¹⁷⁾

中国の雲南省、四川省にまたがる大涼山、小涼山地域では、かつてヘロインが蔓延したことがあった。一部のイ族の人々が注射器での薬物摂取を通じてエイズに感染し、薬物摂取の経験と販売は相互に関連して、一部のイ族の父系氏族関係を巻き込むことすら起こっていた。政府が推進したエイズ予防教育は脅迫的な色彩を帯びており、エイズの病理の深刻さを極度に推し進めたため、その影響は良好なものではなく、エイズの被害について認識を広めたものの、エイズ患者への重大な差別を引き起こし、薬物使用者がヘロインを断つ決心を促す効果を引き起こすことはできな

かった。

十数年前に、中国の人類学者である庄孔韶はイ族研究者の支援のもとで、涼山地域に赴いて見識に優れたイ族の家族集団のリーダーたちとのインタビューをおこなった。そこで明らかとなったのは、薬物の氾濫に強く心を痛める人々に対して、脅しと唯物論的科学主義の宣伝はほとんど無力であることだった。むしろ、年長者の慣習法の力と涼山イ族の人々の家族組織、信仰儀礼、倫理道徳、民俗教育などのレベルの文化資本を動員、活性化させ、薬物依存リハビリの作業とともに、薬物販売者の包圍討伐を奨励することを希望していた、とのことであった。

庄孔韶がこののちに展開した研究は、行動人類学の試みといつてよいだろう。なぜなら、彼と彼の助手たちは家族集団のリーダーたちと協議のうえ、一連の薬物依存治療儀礼を組織して、かつ、生贄の血を啜り、誓いを立てる儀礼を撮影してドキュメンタリーフィルムを撮影したためである。たえざる努力を経て、このドキュメンタリー映像は、涼山地域のテレビで七回放映された。イ族の家族集団のリーダーたちはこのために奔走したが、それはこの映像が家族構成員を薬物から遠ざけたいという彼らの強い思いと、草の根のコミュニティで薬物を断つ運動の文化的な合理性が反映されていると考えたためである。⁽¹⁸⁾

もう一つは、清華大学のある研究グループによる抗H1

V薬の治療効果に関する介入調査である。本研究グループは、数年前に多方面の協力を通じて、雲南省玉溪市の抗HIV薬治療の効果に関するデータを入手し、治療の現場に深く参入することで患者の治療を受けることへの従順性を調査した。三つの患者の対照群研究を通じて明らかとなったことは、売春従事者と薬物使用者のグループに比べて、男性同士の同性愛者の治療受け入れの臨床効果もともと良好であり、その理由は、民間組織が設立したグループ教育ネットワークが玉溪市の都市部および周辺農村部では極めて効果的に男性同士の同性愛者たちが適時的なエイズ検査および抗HIV薬の治療を後押ししていることである。¹⁹⁾

三つ目は、通常の研究、すなわち、一連の研究計画に従って、フィールドの現場で伝染病と社会文化に発生している関係を調査するものである。

ここでは、住血吸虫の例を取り上げる。オーストラリアの人類学者であるマンダーソンは、エジプトでジェンダー理論を応用して研究を展開し、以下のことを発見した。当該地域の女性のあいだで陰部の住血吸虫が広く流行しているが、長い間ほとんど顧みられることがなかった。治療、予防機関は、女性の患者に血尿について報告するよう奨励し続けてきたがこの措置の効果はほとんどなく、その原因として、ムスリムの女性が身体をぬぐう、あるいは小便の際には常に長いローブですっぽりと覆われていることか

ら、陰部の住血吸虫が引き起こす血尿に注意することは困難であり、もし貞操観念のプレッシャーのもとで陰唇割礼をおこなっていた場合には、たとえ血尿に気が付いたとしてもその原因を特定することは難しい。²⁰⁾

マンダーソンはまた、以前、中国の研究者と協力して住血吸虫の問題を研究した際に、収入レベルの異なる農村家庭の病原となる水への接触頻度とその経路を記録して、社会階層の視点から住血吸虫の感染と社会状態と作用を詳細に論じている。²¹⁾

四つ目は考古学研究であって、特に、容易ではない遺跡の発見から、歴史上発生した重大な伝染病感染地域でおこなわれる生物考古学と歴史文献学の研究である。

ペストで死亡した人々の埋葬地と村落の遺跡からの発見と、文献を総合した研究は、中世ヨーロッパにおけるペストの大流行は、ユダヤ人の放逐に従って起こったことを証明した。文献記録、形質人類学の測量、副葬品の総合的な分析を通じて、中世ヨーロッパでのペスト流行に関する死亡率について、年齢分布、信仰のタイプ、社会階層などの面でより正確な証拠が増えてきた。²²⁾

中国では、シルクロードを東西文化交流の懸け橋とみなす研究が、疾病研究によってより豊かになりつつある。この研究は、シルクロード沿いのミイラや古代のトイレの土壌から墳墓が保存した骨盤の土壌までを収集し、七種類の

腸管寄生虫を見出した。このなかには、華支睾吸虫、すなわち中国型肝炎虫も含まれる。湖北省の前漢および戦国時代の遺体からは、肝吸虫の虫卵が発見されており、この人間と動物がともに罹患する伝染病が中国では少なくとも二三〇〇年以上の歴史があることを証明した。中国西北部の二〇〇〇年前に整備された宿場のトイレの土壌からも肝吸虫の虫卵が続けて発見されたことで、肝吸虫が当時シルクロードに沿って一五〇〇キロ以上の地域にわたって感染していったことを明らかにした。言い換えれば、古代シルクロードはアジアとヨーロッパの商業交易を接続し、民族の移動や文化の相互交流を促すと同時に、伝染病の伝播にも機会を与えたのである。

二 医療人類学／疫病人類学における伝染病研究の新しい試みとして

(一) 背景

先述のように、クリミア・コンゴ出血熱ウイルス、エボラ出血熱、ラッサ出血熱、ニパウイルス、リフトバレー熱ウイルス、中東呼吸器症候群、SARSウイルス、ジカウイルスはみな新たな感染性流行病である。近年、新型コロナウイルスが世界保健機関の列挙する新型伝染病の第一〇番目となった。少なくとも、一部の人類学者がこの新たな伝染

病を非常に重視する原因は、大まかに三つあるといえる。まず、一つ目は、人類学者のフィールド研究の場に関係するものである。

人類学者のフィールド研究の場の多くが、開発途上国あるいは低開発地域に位置しており、世界保健機関の定めた一〇種の新たな感染症が、最初はちょうど開発途上国あるいは低中所得国で発見されたことによるものである。これらの国々の科学技術能力は不足しており、中国を除いて、みな自国でワクチンを開発する能力がない。現時点では、ただエボラウイルスに候補のワクチンが開発されたのみである。さらに注意すべきなのは、医療資源が開発途上国では極度に不足していることである。

通常発熱を伴う新たな感染症に十分に対応できない例として、アフリカの十箇所个国家病院では呼吸器すらなく、依然として旧式の酸素ボンベで重症患者の救命にあたっていることが挙げられる。そのほか、新型伝染病は、人間と、動物の血液、尿、糞便、嘔吐物あるいは身体の分泌物や粘膜、破損した皮膚の接触を経て発生し、人畜間と人間間で感染してゆく。この伝染経路は基本的に大部分の新型伝染病に共通しており、ラッサ出血熱、エボラ出血熱、ニパウイルス、マールブルグ熱、MERS、SARS、コロナウイルス肺炎らはみな、直接接触により伝播する。空気もまた、もう一つの伝染経路となる。

しかし、注意しなければならないのは、新たな伝染病の感染様式と宿主を探すことは生物学の事実にとどまらず、新型伝染病の感染様式はつまるところ文化慣習と相關する問題である、ということにある。アフリカの流行地において、葬儀の際に遺体と接触するという慣習は、繰り返しマルブルグ熱とエボラ出血熱の爆発的感染を引き起こした。「注文があつてから絞める」飲食文化の存在する中国では、これが人間と罹患している動物が接触する確率をあげる要素の一つとなつており、これに関する考察が必要である。次に、二番目として、新型伝染病が誘発する人類学的研究の具体的な問題のひとつに、中間的動物が導くウイルスの越境の問題および、ウイルス感染症の政治化、文化的レッテル化を阻止する試みである。

とりわけ、野生動物が宿主であるウイルスが人間世界に越境し宿主を探す問題が挙げられる。リフトバレー熱は蚊に由来し、ジカウイルスも同じである。クリミア・コンゴ出血熱ウイルスはダニ、MERSはヒトコブラクダ、ラッサ出血熱は野ネズミ、ニパウイルスは蝙蝠、エボラ出血熱とマルブルグ熱は同じく猿に由来する。SARSと新型コロナウイルス肺炎についても野生動物が疑われている。新型の伝染病が稀にしか見られないウイルスによって生み出されることは、必然的に生物多様性の事実を意味する。加えて、関連する予防対策もまた、異なる政治体制と文化

伝統という社会的事実を明らかにする必要がある。

そのうち、より重要なことは、偏見や差別、誹謗、さらには排斥が、新型の伝染病の大規模な流行に伴つて現れ、かつ、増幅することかもしれない。そうであるからこそ、ハーバード大学、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校、デューク大学などの高等研究機関に所属する長期にわたつて中国研究に従事する人類学者が、新型コロナウイルスの大流行からすぐに署名活動に参加した。その目的は、感染症の政治化、文化的レッテル化を阻止することを学術界に呼びかけるためであった。

こうした諸種の阻止運動と政治家たちが政治的正確さへの敏感性を持たざるを得なかつたことから、世界保健機関が提示した「COVID-19」の名称が、「武漢ウイルス」という名称を圧倒した。これは中国の肩を持つたのではなく、世界保健機関が二〇一五年にすでに決定していたように新たな感染症の命名権をその下部組織である国際疾病分類委員会へと受け渡していたこと、そして命名に際して動物の名称、人名、国名、地名を用いることで汚名としてしまふことを防ぐことになつていたのである。

そして三番目に、医療人類学の世界において重要な命題的関心事のひとつは、疾病の意味の社会文化的構築である。この点についての議論を展開する一つの切り口は、ステイグマ化である。患者が名誉を汚される形式はそれぞれ

に異なる。感染症についていえば、ハンセン病患者は古代から、場合によっては現在までステイグマ化がなされた程度が甚だしい。国内外の社会学および人類学の関連する研究は、たびたびゴフマンの「ステイグマ理論」を分析枠組みとしてきた。ゴフマンのステイグマ帰属定義は、社会グループのステイグマは三つの排斥される差異化に基づくとしている。すなわち、一つ目に身体の障害あるいは変形、二つ目に異なる人格や性格、三つ目に民族あるいは信仰などにおける文化的差異としている。²⁴⁾

現代の臨床医学が誕生したのちの、アメリカの伝染病患者のうちでそのステイグマがもっとも深刻であったのは、メアリー・マローンである。二〇世紀初め、発疹チフスリケッチアがニューヨークで流行した当時、メアリーは八つの家庭で食事を作っていた。彼女自身が無症状患者であったことを知らず、結果的に五三人に感染させ、そのうち三名が死亡した。彼女が警察に拘留されたあと、メディアは大々的に「腸チフスのメアリー」という言葉を流布させ、政敵への大きなプレッシャーを創り出し、ニューヨーク衛生局は、彼女に二年間の隔離を強制することとなった。隔離が解除されたのちも、「腸チフスのメアリー」を報じたニュースが彼女の実名と写真を使用したことから、メアリーは仕事を探すことができず、流浪の身となり、亡くなるときにでさえ故意に伝染病を感染させたというステイグ

マを伴うこととなった。²⁵⁾

ここで解説すべきなのは、メアリーがアイルランド人であり、当時のアメリカ合衆国においてアイルランド人が差別を受けた主な原因がその移民の身分にあることである。アメリカのアイルランド人は、何度かのアイルランドにおけるジャガイモ危機のときにアメリカに渡った経歴があり、一〇〇年余りさかのばればみな避難民であったことから、アメリカへの移民後には主に社会の下層の職業カテゴリーに分類される仕事に従事していた。²⁶⁾

世界保健機関の指定した一〇種類の新たな伝染病のうち、リフトバレー熱はケニアの地名から命名されており、エボラ出血熱はコンゴの河川名に由来する。ニパウイルスは、マレーシアの村落名、クリミア・コンゴ出血熱はウイリスの社会地理的分布が極致に達した地域からその名がとられた。実際、地名から疾病を命名するにあたって、科学的意味はなく、一種類あるいは数種類の伝染病はまったく異なる場所であることも起こりうる。ラッサ熱のウイルスは国外から来た宣教師が死亡したことから公的な注目を受け、虱潰しに病原の調査をおこなう過程でまずナイジェリアのラッサという町で感染者を発見した。この町と五〇キロ以内の村落、小さな町には何ら差異がなかったが、ただ虱潰しの病原検査の最初の努力がこの伝染病の命名に結び付いた。ある伝染病が命名された後、ラッサ村落全体は陰

りのなかで衰退した。

ラッサ村落に類似した例は中国にもある。十数年前に、河南省の農村でスクリーニング検査の結果、売血をしていた大量の農民たちがエイズに感染していることがわかった。一時期、河南省のエイズという言い回しがメディアを通じて広く流通し、河南省上蔡県では、二〇〇三年の一年間で外地に出稼ぎに出ていた三〇万人の農村出身の労働者たちが押し戻される事態となった。同時に、河南省のエイズ患者が血液のついた注射針を故意に他人に刺しているという悪辣な流言も現れた。

このように、患者のステイグマの社会分布には、明らかに断層的なラインがある。ゴフマンの言う差異ある身体、性格、民族や地域と新興宗教の他、社会的地位や意識形態、文化伝統、国籍、さらにはある国家の世界における経済的なポジションも疾病ステイグマの断層ラインとなり得る。ここでいう断層ラインとは、自己と他者を分かち非常に明確なラインである。この分離は、困難な状況にある個人、グループ、コミュニティ、地区、国家、ひいては人類共同体に対しても不利に働くことが明らかである。これは人類学が疫病研究を重視する背景である。

(二) 医療人類学のアプローチとして

医療人類学の分野では、ローカルな生物学の概念もまた

使用頻度が高く、かつ重要である。その核心的な思想は、生物学はローカル性があるということだが、このローカル性は二つのレベルで発生する。

一つ目は、生物学の意義上のものであり、ローカルな特性を持つ生物種、自然環境、飲食の構造が人間の健康へと影響を与えることである。二つ目は、社会生物学の意義上のものであり、地域的差異やローカル社会の文化的制約を受けた人間の行為と認知である。前者は地域的な疾病を例にとることができる。後者は、飲食文化がその典型例である。この両者の総合は、生物学的な血縁関係と社会的な親族関係の連結にみることができるが、エボラ出血熱を例に述べていこう。

二〇一四年三月に、エボラウイルスが西アフリカで流行し始めた。二年余りの間にギニア、リベリア、シエラレオネの三か国で合計二万八六一六人に感染し、一万一三二〇人が亡くなった。科学者たちの努力によって、分子疫学(molecular epidemiology)がエボラ流行期間中に運用可能となった。その鍵となったのは、感染者の血液サンプルを採集し、遺伝子系図の分析を通じてウイルス伝播の基本的法則を見出したことである。しかしながら、現場での流行病の調査が、エボラが町から遠く離れた農村からそのほかの農村へ、続いて都市に向かっていった伝播の経路は幾筋かの道路であったことを最初に見出した。患者の証明可能

な遺伝関係の遠近についての分子疫学がこれを後追いで証明したのだが、一点から多点へ、農村から都市へ広がったエボラウイルスの感染は、ネットワーク的状况を形成しており、その核は血縁関係である。

人類学的なより進んだ解釈では、この一帯の人口流動は血縁と婚姻関係を相当程度反映している。アフリカの最貧困国家に列なるギニア、リベリア、シエラレオネの三か国では、普通の人々の就学、就職、医者にかかること、避難、救いをもとめること、ビジネスをすること、栄転すること、あるいはその他の生計に関わる大きな活動は、すべて親族関係と切り離すことができず、人口流動の方向も普通は親族のいる場所へと向かう。ウイルスの地理的分布と移動経路は、ほとんど親族関係の地理的分布と移動経路に等しいのである。⁽²⁸⁾

以上の発見に従えば、家庭での予防と、親族ネットワークを一致させるべきだが、実際はそうならなかった。

エボラの流行が猛威を振るった時期、この地域の埋葬習俗は遺体の洗浄を直系親族によることとしていた。そのために、いわゆる直接遺体に接触したスーパースプレッダーが現れた、という説がある。シエラレオネ政府はこのためにペナルティ措置を採用し、国民が伝統的葬礼に参加することを禁じ、遺体は防疫スタッフしか処理できないようにした。そして、どのように安全かつ尊厳ある葬礼を実施す

ることができるかという問題が、すぐにイギリス人類学エボラウイルスネットワークの場での議題の一つとなった。

オランダで研究をしていた人類学者であるリチャードはこのことについて報告書を作成して、ほかの事柄に触れずに葬礼だけを論じることはできないという認識を示し、患者へのケア、臨終にあたっての心遣い、死亡埋葬の三つのステップを合わせて検討する必要性を指摘した。彼は、ある現地調査の結果を引用して、三割以上の調査対象者が自分は何なる理由があろうとも親族とコミュニティの尊敬を受けた人々の葬礼をおこなう、と回答していることを提示している。この割合は、たとえ大災害に遭遇しても一部の人は哀悼を示す伝統的な儀式を放棄することが難しく、仲間たちが寂しい状況の中でこの世を去ることを放っておけず、さらにはこうした努力がすでに臨終以前から起こっていることを示している。それぞれのタイミングで医療支援チームが疫病流行地域に到着しても、限りある人的資源と有効性に限界のある薬物しかない以上、多くの患者が重症や末期になれば自宅に帰され親族のケアを受けることになる。

エボラの流行地域が軍事化しているという事態は、外からの援助が届いても末端の家庭に届けられない状況に陥ることを意味している。葬礼から感染するリスクに比べて、家庭でのケアによる感染リスクはさらに大きく、もし迷信

に属する伝統的葬礼を非難するだけで、家庭でのケアが直面している感染リスクへの関心を払わないなら、この種の非難により、さらに大きな誤りを見逃してしまう。

エボラの流行地は、普遍的に医療や薬品が欠乏しており、政局が不安定で、国際組織による当該地域の人々の文化習俗への理解も極めて乏しい。ニュース伝達の技術も比較的劣っており、広く社会を動員することや健康教育を実施することはさらに難易度が高い。感染が爆発的に拡大した後、家族と親族のネットワークはほぼ唯一の信用できる社会単位とケアの単位となっていた。もしケアをする人々がすでに頻繁に、臨終を迎える人々と接触していたとすれば、必然的に遺体を洗浄するのも家庭のケアの一部となつたのである²⁹。

以上の分析により、イギリス人類学エボラウイルスネットワークでは、家庭での安全なケアの経験を推奨した。これは、西アフリカの感染症への対応能力の低下と、一部の人々が個人的に患者をケアしている社会的事実を直視したものであり、家庭を単位としたウイルス遮断戦略を採用することを提案したのである。また、この推奨は、一方で、感染状況の緩和を家庭に頼りつつ、慎重な方法を採用することで遺体の処理を家族に許すものでもあった³⁰。

そのほか、人類学研究に基づく建設的な問題解決の方法は、隔離である。感染が拡大した後、感染者の隔離措置が

必須となった。しかし、政府の人的資源には限界があり、家から家へと隔離者へ生活必需品を届けることができず、村人の手助けが必要であった。だが、感染していない村民の恐れは大きく、隔離された家族を支援することに消極的であり、場合によってはこうした家庭は感染症の悪化について責任を負うべきであり、支援を得るべきではないと考える人々すらいた。

これらの問題に対して、イギリス人類学のエボラウイルスネットワークでは、現地政府と国際組織が関連対策の制定を援助するために特別なガイドブックを編集した。この文書は、除隊軍人への福利カードの配布方式を借用して、隔離された家庭に簡易携帯電話といくばくかの経費を送り届けることで、コミュニティのメンバーにこれらの家庭が隔離され続けることによつてコミュニティの安全に貢献していると示すことができることを提示した。この提案は、すでにおこなわれてきた人類学のフィールドワークの経験に由来している。人類学者たちはかつてこの一帯での定点調査をおこなつて以下の事柄を知っていた。シエラレオネの内戦終了後に大量の軍人が復員し社会に回帰したが、コミュニティでは政治的立場の相違から蔑視される、あるいは排斥されていた。これに対し、新政府は政局を安定させるため、すべての老兵に少額の福利費を提供した。この福利カードは、新政府を支持する老兵たちにとって国家が自己

を承認してくれる指標となり、かつて新政府に反対した老兵たちについていえば、こうした福利は新たな政権が過去の遺恨を問題にしない国家の行為を代表するものであり、政府に協力しコミュニティに溶け込もうとしさえすれば、⁽³¹⁾ 公民の資格にかなっていることをはかる指標となっている。

(三) 健康の社会的決定要因の視点として

医療人類学の研究においては、社会理論の一部である健康の社会的決定要因説の影響力が極めて大きい。この学説のポイントは、社会的・経済的地位が人々の健康レベルを決定するのであり、社会的・経済的地位が高ければ高いほど健康レベルも高くなり、そうでなければ健康レベルはますます低くなる。しかし仮に機械的にこの健康の社会的決定要因説を用いれば、例えば、ただ収入レベルや教育程度、官職や職業のみを指標として社会経済的地位が健康レベルに影響するとして分析するのであれば、その結果は、部分的な社会的事実を再度述べることとどまるであろう。健康の社会的決定要因説をうまく運用しようとするれば、その他の理論的架橋が必要となる。

健康の社会的決定要因説に比べて、マルクス主義の理論的背景がある構造的暴力論にはさらに深い考察があり、ラテンアメリカの研究者による制度化された冷淡説 (Institutionalized Cold-Hearted Theory) とも相互に響きあっている。

る。構造的暴力の概念は、ノルウェーの社会学者であるヨハン・ガルトウングによる、人々の生存欲求、健康欲求、身分への欲求、自由への欲求が剥奪されたことについての分析と批判に由来している。

いわゆる構造的暴力とは、社会制度、福利制度、就業制度、医療制度が意識形態と組み合わさる暴力である。構造的暴力と戦争暴力、民族の衝突あるいは犯罪暴力との異なる点は、それが合理化、合法化、自然化されているという性質にある。ガルトウングによれば、平和な時期の最も典型的な暴力の形態は構造的暴力であって、それは国境を越えた経済体が資本を用いて政府にレントシーキングをおこなうことに集中的に表れている。資本権力と国家権力が手を結ぶとき、メディアを買収し、異なる政治的見解を封殺し、正義をおこなう知識人の公共イメージを棄損し、保守団体を扇動して公平な社会発展のための立法に反対する。その目的は、グローバルな範囲で資本主義を拡張し搾取を進めるために便利だからである。

構造的暴力の学説に呼応する制度化された冷淡説は、ラテンアメリカの左翼系知識人によるが、その要点は「解放の神学」(Liberation theology) を用いて、カトリックの権威ある人々が貧困状態にある人々のグループに関心を持たないことへ挑戦する。ラテンアメリカの貧困者居住地区においては幼児の死亡率が低下せず、貧困者たちは極度の栄

養不良状態にあり、彼らの多くは失業しており、家庭が次々と破綻しており、青少年の犯罪も低年齢化している。これらはみな、制度化された冷淡さに由来しており、社会においては抗議を引き起こすこともできずにいる。

しかし、社会の上流に位置する人々はこの問題を一顧だにせず、メディアも報道の責任を負わず、中流階級は犯罪率の高いコミュニティから逃げ出す傾向にある。社会正義についての思想は社会全体において後退、萎縮して、制度化された冷淡さが悪化している。このため、解放の神学は、社会が規律を失っている責任を貧しい者から豊かな者、権威のある階層、中産階級、知識界、ニュースメディアへと移行させ、そして教会をその中心的な矢面に立たせる。⁽³³⁾

制度化された冷淡説の批判は、しばしば下層からの声とパースペクティブを欠いており、人間の主体性、能動性、主体意識が基本的には見当たらない。この問題は、悲しみと思ひやりを切り口とする医療人類学研究のなかである程度は修正可能である。例えば、二〇一五年以降、ジカウイルスについての科学論文が次々と現れている。妊婦がジカウイルスに感染すると、胎児に小頭症をもたらす。このウイルスは、まず、ブラジルの東北部に現れた。このウイルスに関する被害は、はじめゴシップによる伝播を経て、大量の新生児の頭部に障害が現れた伝説がソーシャルメディアを通じて次々と恐慌をもたらした。

世界保健機関は二〇一六年二月、正式にジカウイルスが国際的な関心を集める公共衛生の事件であると声明を出した。二〇一七年一月までに各地からブラジル衛生機関へ一万四九一六例の疑わしい病例と、三〇〇〇例の確定事例が報告され、そのほか二八四六例については調査中とされた。確定した病例のうち、一九六三例はこの時点で専門科での治療を受けている最中であった。ウイルスの流行が始まってすぐに、ブラジルの著名な人類学者であるデボラ・ジニスは二つの種類のグループへの研究に着手したが、一つの目のグループはパラíba州の医師と科学者であり、もう一つのグループはパラíba州の妊婦とその家族であった。⁽³⁴⁾

ブラジルでは、パラíba州から検出されたウイルス感染者が国内で最も多く、さらにこの地域は様々な民族的背景の人々、黒人、ネイティブアメリカ、アジア系の人々が多数を占める周辺の地域である。ブラジル西南部に比べて、パラíba州は発展から非常に取り残された地域といえる。ブラジル全国の生活水準において、貧困ライン以下の人口比率は二五%に達しているが、パラíba州に関する比率は四五%にのぼる。医師や科学者へのインタビューのなかで、ジニスはジカウイルス禍の報告が遅れが発生していた問題を知るにいたった。現地の医師たちは、その臨床経験から、小頭症の嬰兒が通常では考えられないほど現れていることを感じていたのである。

このため、医師たちは、現地の科学者たちとの議論を通じてめつたに見ないウイルスを原因として疑っていたが、遠く南部の権威ある科学者はこの種の推測を軽くあしらい、辺鄙な地域の医師や科学者がウイルスを識別できていないと考え、稀なウイルスについての臨床症状について議論の資格がないとみなすことさえあった。蚊を媒介とするジカウイルスの人類への感染例は、古くは一九四〇年代のウガンダで発見されていたが、その後はほとんど等閑視され、またそのあとは現れなかったことから、まさに極めてまれなウイルスに属するものであった。爆発的感染に見舞われたパライバ州の医師と科学者たちは、圧力をはねのけて感染状況を公開し続けることで、世界保健機関の介入を促し、ついにジカウイルスのブラジルにおける流行の真相を明らかにしたのだった。

そのほか、妊婦へのインタビューに基づいて、ジニスはパライバ州の社会の低層の人々の生活が劣悪な環境の中で、蚊が集まる水場から取水していることを知った。ブラジルでは墮胎は違法行為であり、産児制限は推奨されておらず、底辺社会に生きる女性には妊娠検査の機会が乏しい。流産をしても自分が感染していることを知らない妊婦もいる。しかし、こうした女性たちから死亡した嬰兒を科学研究機関に献体することは容易にできることではなかった。最終的にジカウイルスを確定したのも、女性が研究機

関に提供した嬰兒の遺体の頭蓋部からこれが発見されたことによる。ほかにも、女性たちが自らの羊水を病院に提供し検体したことで、医師らがジカウイルスを検査する能力を引き上げることになった。

ジニスは、パライバ州の医師や科学者たちが感染状況を公開し続けた何者も恐れない精神と科学研究のために貢献した女性たちを描くにあたって、慈悲に関する社会学分析の枠組みを借用し、制度批判の限定性を回避している。彼女の研究は、特に、極度の困難と非常に深い悲しみのなかにあっても利他主義的精神が凝縮した感情を放棄しなかった弱者グループを捉えている。慈悲の社会学の主旨は、個人が見知らぬ人の苦痛に同情心を生み出す本能がどのような集合的な悲哀へと昇華するのかわという問題である。ジニスの人類学研究は、医師たちの仁の集合性を提示しており、かつ、女性患者たちの「同病相哀れむ」論理を詳述した。

三 中国で流行する新型コロナウイルスに関する人類学的研究

新型コロナウイルスが中国で大規模流行するまで、新型コロナウイルスに関する中国の人類学研究は一貫して少なく、二〇〇三年のSARSについての中国人類学の論文もわずかに数篇のみであった。そのなかには徐傑舜による衛生陋習

に関する論述や、杜靖の農民が天を祀り爆竹を鳴らして疫病神を送り出した記録、この論文の前半で提示されている胡宗澤が河北省で遭遇したSARSの現地研究が含まれる。新型コロナウイルスの爆発的流行を経て、中国人類学の反応は大きく異なってきた。これが以下で議論したい状況である。

新型コロナウイルスの大規模流行ののち、中国の人類学者たちは即座に行動を起こしており、とりわけ注目しているのは雲南大学の支援のもとで二九項目の調査研究プロジェクトが始動したことである。このプロジェクトの中で、ある調査者は日常生活上の利便性から自身の身近に発生した防疫問題を探求しており、また、アンケート調査を通じて健康の「知行信」研究を始めた調査者もいる。

さらに、各種のコネクションを利用して国境部の防疫研究を展開する学者もいる。この研究プロジェクトのなかでは、基層コミュニティにおける防疫を分析することを試みる研究が多数を占めている。ただし、細かく見れば二九項目の研究課題を三種類に分けることができる。一つ目は、疾病の伝播に関する分析であり、二つ目は疾病がもたらす衝撃に関する分析であり、三つ目は応急対応についての分析である。

第一の分類に含まれる研究に基づく判断は、以下のよう

ウイルスの伝播法則は、はじめにウイルスを持った野生動物が市場に入ることによって、ウイルスが市場において動物の宿主から種族を超えて人間に感染し、患者が病院で医療スタッフやほかの人々へと感染を広げる。大規模な集会やコミュニティの会食などの社交活動によってさらにウイルスが拡散した。旧正月前の大規模な人的流動によってウイルスが湖北省から各地にもたらされる契機になり、各地では社会的距離を十分にとらず、医療機関の防備が緩かったために、ウイルスは一部のコミュニティで感染を広げ病院での感染拡大を招いたことすらあった。この連鎖のなかで、ウイルスをもった生物が種族を超えることが第一波のウイルス伝播の問題である。

雲南大学のプロジェクト経費の支援の下、浙江大学の徐俊芳は一部の中国の飲食行為から出発して、野生動物の「饕餮」（『山海経』で紹介されている悪食の怪物）研究を始めており、地理空間の情報を利用し、野生動物のレストランの広告を探求し、その他の野趣あふれる味わいの情報と野生動物の種類、それらを提供する店の地理的分布を収集している。

二つ目の分類に入れた研究に基づく判断は次のようなものである。

感染症は社会生活に深刻な衝撃を与えており、その影響のありかたは、ロックダウン、隔離、正常な仕事のやり方

の停滞、経済的不況、ほかの疾病を患っている人々が治療を受けることの困難さ、学生が登校できないこと、家に引きこもる生活、家庭内の矛盾、心理的危機および新型コロナウイルスによる死者の葬儀の問題に及ぶ。これらの問題のうち、新型コロナウイルスによる死者の葬儀の問題は、「人気のない分野」と言ってもよい。この問題に対して、中国人民大学の郭躍山は雲南大学の資金援助を得て、新型コロナウイルスの感染状況と一九一〇年の東北地域で起きたペストの流行時期における遺体埋葬と葬儀の形式との比較研究を始めている。

第三の分類に含めた研究に基づく判断は、次のものである。応急措置的行為は最初に医療スタッフのなかで発生しており、その後が発生するコミュニティの隔離、宣伝への動員、親族や友人間の WeChat による連絡網の形成、寄付や救援などの行為といったものは、すべて正のエネルギーマスの範疇に属しており、プライバシーの暴露や排斥、極端な例では感染者を罵ることといった行為は負のエネルギーマスに属する問題である。これらの問題に対して、雲南大学、中山大学および中山大学付属病院の支援の下で、中山大学の余成普は広東省湖北支援医療チームの帰郷のための臨時隔離ホテルに住み込み、医師や看護師ら感染症対策の最前線にいる人々のオーラルな資料の収集をおこなっている。

現在、進行中の研究プロジェクトを除いて、中国の人類

学ではすでにタイムリーな論文が発表されている。そのうち、何明は生活様式と人間関係のネットワークを切り口として、新型コロナウイルスの予防、コントロールについての社会的ロジックを分析した。景軍と高良敏は新型コロナウイルスの早期警戒に関する社会条件を討論し、項飜は人口の流動がもたらした新型コロナウイルスの予防、制御が直面している困難を分析した。潘天舒はかつておこなった鳥インフルエンザの研究を基礎として人々の適応性叡智と新型コロナウイルスの関係について突破性のある論述をおこない、秦紅増が大規模な感染症に関する調査研究は人類学と多分野、多部門の協力の必要性があることを指摘した。このほかにも、人類学の博士課程の学生である齊騰飛はアフリカからケニアの防疫に関する分析レポートを送ってきており、現在、論文審査の段階にある。

総じて、中国の人類学は、新型コロナウイルスに対する反応として、時宜にかなった、能動的で多様な視角による研究方向を呈していると言える。

結 論

晩年の費孝通は時代的感性に溢れた文章である「文化論のなかの人と自然の関係の再認識」を発表している。この文章は短いが、その言及する問題は非常に重い。長きにわ

たつて人類学と社会学の視点から発展の研究をしてきた費孝通は、この文章において簡潔な語句で、高度な現代化が進むプロセスにおいて「物と我との対立」意識もますます色濃くなってきたと述べている。曰く「この種の傾向のもと、我々人文世界は人のために自然界を改造することが成就できるように理解されているが、これは人文世界と自然界を対立させるだけでなく、生物であるところの人もも自然界と対立させるようになる」。

続けて費孝通は「人と自然の対立を基本的な観点とすることで、すでに自然による抵抗を引き起こしており、はっきりしていることは、汚染された環境がまさに人々に生活の困難をもたらしている、このことを現在の人々が感じていることである。これは、自然を征服しようという愚かな試みに対する自然による小さな反抗の事例に過ぎない、と言える」。人間の力が自然に打ち勝つという世界観に陥ることをどのように脱するのかについて論及するとき、費孝通は次のように指摘する。「中華伝統においては、一貫して古典『易经』を高く評価する流れがあり、『易经』は主に陰陽が相補って統一する太極を説いている。太極とはすなわち我々が近年言うところの宇宙であり、二つが合わさって一つになることがその基本的な公式である。天人合一とはまさにこの宇宙観の見解であって、中華伝統とは、総じて言えば、分立に反対し統一を主張するものであり、大統

一は天人合一の表明である。我々はこれまで天と人との対立に反対しており、極大化した功利主義の態度をもって一方的に自然を人間の需要に合うように改造することに反対し、人間が可能な限り自然に適應することを主張してきた⁽³⁸⁾」。

費孝通の透徹した論述を参考にすると、近年の人類学における存在論的転回の努力は、人間を取り巻く自然の位置づけと、自然の人間世界における位置づけをめぐる弁証論的な思考を運用することでよりよく理解できる。本論が提示した伝染病に関する人類学研究が示したように、我々は疫病研究に関しても、縁起論、総体論および生態理念の天人合一論を支える豊かな思索を用いる必要がある。

縁起論とは、現象の存在を単独のものとはみなすのではなく、各種の条件が合わさって成立しているとみる立場である。総体論は、世界全体が変化の予測できない関係ネットワークのなかにあり、不可分の全体として存在し、各部分すべてが相互依存的なファクターであって、人と自然の関係も生い茂る葦のようにお互いに依存しあっているとみる考え方を指す。

中国の医療人類学が過去二〇年余り発展してきた基点は、天人合一論を体现する生物社会一体性の理論である。具体的な研究は、海外の医療人類学の発展の経験を参照しつつも、ある程度の国内の実証的研究の成果を下地として

いる。これと同時に、中国大陸の医療の多元性という事実が豊富な研究材料を提供しており、医療人類学研究の更なる発展の宝庫となっている。また、中国大陸の疾病リストの変化は、医療実践と社会変遷に関する多くの重要な問題と結びついており、このことは、中国の医療人類学研究により強い社会との関連性を持たせることとなっている。中国の高等教育機関には医療人類学の専門の人材養成機関が設置され、その数はまだ今後の増加を期待するところであり、機関の能力もさらにレベルアップさせる必要があるが、本論に取り上げているように、中国の医療人類学の分野では、医学のわき役ではなく、ほかの国の研究者たちと同様に、人類の健康、疾病や苦痛、医療制度、人類の生物文化適応性につながる生物と社会を一体化するパースペクティブから人類の健康問題などに関して、独自の領域で考察を展開している。

もし過去二〇年間で中国の人類学がエイズの予防と治療行為に対して広汎に介入し大いに協力していたもの、SARSの流行以降は医療人類学分野による大規模な考察がなかったとすれば、新型コロナウイルスが大流行しているなか、中国における疫病に関する人類学的研究は、かつてのエイズ研究の系譜を受け継いだうえで、社会全体における受動的な局面を避けるため、文化と社会領域に成しえるところがあるかもしれない。

注

- <1> Martin Holbraad and Morten Pederson, *The Ontological Turn: An Anthropological Expedition*, Cambridge University Press, 2017, pp. 1-27.
- <2> Roy Wagner, *The Invention of Culture*, University of Chicago Press, 1981. Carol MacCormack and Marilyn Strathern, *Nature, Culture, and Gender*, Cambridge University Press, 1980.
- <3> Bruno Latour, *An Inquiry into Modes of Existence: An Anthropology of the Moderns*, Harvard University Press, 2013.
- <4> Eduardo Viveiros de Castro, *Cannibal Metaphysics*, University of Minnesota Press, 2013.
- <5> Philippe Descola, *Beyond Nature and Culture*, University of Chicago Press, 2013. [邦訳 小林徹訳『自然と文化を超えて』水声社、二〇一〇年]
- <6> Eduardo Kohn, *How Forests Think*, University of California Press, 2013. [邦訳 奥野克巳・近藤宏監訳、近藤社秋・二文字屋脩訳『森は考える——人間的なるものを超えた人類学』亜紀書房、二〇一六年]
- <7> 徐傑舜、朱炳祥「主体民族誌與民族誌範式変遷」『広西民族大学学报』（哲学社会科学版）二〇一六年第四期、三九—四四頁。朱炳祥、張佳梅「本体論回歸與主体性訴求」『広西民族大学学报』（哲学社会科学版）二〇一八年第四期、一一四—一一九頁。

- 〈8〉 王銘銘「聯想「比較與思考」』《學術月刊》二〇一九年第八期，一四三—一六七—一七八頁。王銘銘「當代民族誌形態的形成——從知識論的轉向到新本體論的回歸」《民族研究》二〇一五年第三期，二五—三八—二二二—二二四頁。
- 〈9〉 朱曉陽「地勢民族誌和本體論轉向的人類學」《思想戰線》二〇一五年第五期，一一—一〇頁。
- 〈10〉 朱劍峰「跨界與共生——全球生態危機時代下的人類學回應」《中山大學學報（社會科學版）》二〇一九年第四期，一三三—一四二頁。
- 〈11〉 John H. Amarsi, Tamara Lucas, Richard Horton, and Andrea S. Winkler, "Reconnecting for our Future: The Lancet One Health Commission," *The Lancet*, 9 May, 2020, 395 (10235): 1469-1471.
- 〈12〉 許煒光『祖蔭下』（*Under the Ancestor's Shadow: Kinship, Personality, and Social Mobility in Village China*）台北：南天書局，二〇〇一年。
- 〈13〉 Francis L. K. Hsu, *Magic and Science in Western Yunnan: The Problem of Introducing Scientific Medicine in a Rastic Community*, 1942.
- 〈14〉 石峰「在知識的天平上」《教育文化論壇》二〇一三年第二期，八〇—八二頁。
- 〈15〉 胡宗澤「村民眼中的國家——對華北一個鄉村予防非典事件過程的考察」《社會》二〇一一年第六期，一〇三—一二九頁。
- 〈16〉 Charles Briggs and Clara Martini-Briggs, *Tell Me Why My Children Die: Rabies, Indigenous Knowledge and Communicative Justice*, Duke University Press, 2016.
- 〈17〉 Tracy Kidder, *Mountains Beyond Mountains: The Quest of Dr. Paul Farmer, a Man Who Would Cure the World*, New York, Random House, 2009.
- 〈18〉 庄孔韶「虎日的人類學發現與實踐」《廣西民族研究》二〇〇五年第二期，五一—六五頁。
- 〈19〉 景軍、高良敏「同性戀防艾組織城鄉一體化的作用及意義」《青海民族研究》二〇一八年第一期，三二—三六頁。
- 〈20〉 Lenore Manderson, et al., "Social Research on Neglected Diseases of Poverty: Continuing and Emerging Themes," *PLoS Neglected Tropical Diseases*, 2009, 3(2).
- 〈21〉 Huang Yixin and Lenore Manderson, "Schistosomiasis and the Social Patterning of Infection," *Acta tropica*, 1992 (51.3-4): 175-194.
- 〈22〉 Sharon DeWitte, "The Anthropology of Plague," *The Medical Globe*, 2012 (1): 1, Article 6. Hui-Yuan Yeh and Mitchell Piers, "Ancient Human Parasites in Ethnic Chinese Populations," *Korean Journal of Parasitology*, 2016, 54(5): 565-572.
- 〈23〉 楊端馥「絲綢之路與傳染病傳播」《中國基礎科學》二〇一三年第六期，一六一—一八十六頁。
- 〈24〉 Zachary Gussow and George S. Tracy, "Status, Ideology, and Adaptation to Stigmatized Illness: A Study of Leprosy," *Human Organization*, 1968, 27(4): 316-325.
- 〈25〉 Michele Petriti, "Disease and Stigma: A Review of Litera-

ture," *Health Educator*, 2008(2): 70-76.

- <26> Kevin Kenny, "Race, Violence, and Anti-Irish Sentiment in the Nineteenth Century," J. J. Lee and Marion R. Casey eds., *Making the Irish American: History and Heritage of the Irish in the United States*, NYU Press, 2003, pp. 364-378.

- <27> 景軍、唐麗霞、趙紅心、陸羽「艾滋病與中國扶貧工作」靳薇主編『中國面對艾滋病』國際中國文化出版社「二〇〇四年」二二五-二四一頁。景軍「艾滋病謠言的社會淵源」『社會科學』二〇〇六年第八期「五一-七頁」。

- <28> Vinh-Kim Nguyen, "Of What Are Epidemics the Symptom?" Ann Kelly, Frédéric Keck, and Christos Lynteris eds., *The Anthropology of Epidemics*, Routledge, 2019, pp. 154-177.

- <29> Paul Richards, Do funerals spread Ebola in Sierra Leone? <http://www.ebola-anthropology.net>.

- <30> Fred Martineau, Annie Wilkinson, and Melissa Parker, "Epistemologies of Ebola: Reflections on the Experience of the Ebola Response Anthropolgy Platform," *Anthropological Quarterly*, 2017, 90(2): 475-494.

- <31> Maria Berghs et al., Stigma and Ebola. <http://www.ebola-anthropology.net>.

- <32> Johan Galtung, "Violence, Peace, and Peace Research," *Journal of Peace Research*, 1969, 6(3): 167-191.

- <33> Christopher Rowland ed., *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Cambridge University Press, 1999.

- <34> Debora Diniz, *Zika: From the Brazilian Backlands to Global*

Threat, ZED Books, 2017.

- <35> Natan Schnaider, "The Sociology of Compassion: A Study in the Sociology of Morals," *Journal for Cultural Research*, 1998, 2(1): 117-139.

- <36> 胡宗澤「村民眼中的國家——對華北一個個鄉村預防非典事件過程的考察」『社會』二〇一一年第六期「一〇三-一二九頁」。徐傑舜「文化愚昧與文化自覺——SARS災難的人類學透視」『廣西民族大學學報』(哲學社會科學版)二〇〇三年第四期「五四-五九頁」。杜靖「避難」非典「十四日」『民族藝術』二〇〇三年第三期「九九-一〇二+一〇八頁」。

- <37> 何明「生活方式、社會網絡與疾病防控——重大傳染病疫情的人類學研究框架」『廣西民族大學學報』(哲學社會科學版)二〇一〇年第一期「四六-四九頁」。景軍、高良敏「新型傳染病傳播的社會特征」『西北民族研究』二〇〇〇年第五期「八〇-八七頁」。項繩「流動性聚集和陀螺式經濟假說——通過非典和新冠肺炎疫情看中國社會的變化」『開放時代』二〇一〇年第三期「五三一-六〇十六頁」。潘天舒「重大公共衛生事件中應如何作為——來自醫學人類學哈佛學派的啓示」『廣西民族大學學報』(哲學社會科學版)二〇一〇年第一期「五〇-五三頁」。秦紅增「合作人類學與中國社會研究——從二〇一九新型冠狀病毒疫情防控談起」『廣西民族大學學報』(哲學社會科學版)二〇二〇年第一期「五四-五七頁」。

- <38> 費孝通「文化論中人與自然關係的再認識」『群言』二〇〇二年第九期「一六一-一九頁」。